福岡女学院大学紀要　人文学部編　第二十四号
二〇一四年三月

和歌の解釈

―『伊勢物語』第十四段をめぐって―

末沢明子

和歌の解釈

―『伊勢物語』第十四段をめぐって―

末沢明子

1

和歌には表に現れた歌意とその裏にある歌意があることがある。今採り上げたいのは『伊勢物語』十四段、京の男が別れに際し、陸奥国の女に贈った

　栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざと言はましを

である。この歌は、京の男が鄙の女を揶揄した歌で、女はそれを理解せず、男が自分を思っているらしいと言っていた、というのが古注釈以来、現在に至るまで大方の解釈である。が、歌自体の解釈には揺れがある。その揺れは、この和歌が物語の舞台に合わせて地名を読み替えた原歌、

　小黒崎みつの小島の人ならば都のつとにいざと言はましを（古今・二十・東歌・一〇九〇）

にはない。揺れは地方の美しい景を愛でる原歌に裏の意味を付加したことから生ずる。

女に対して言外に「だが…」或いは「だから…」と言う。「だが」か「だから」かで解釈の揺れがある。物語中の贈答歌の中には相手を揶揄する歌がある。十四段の男の歌も大方の解釈でいえば揶揄する歌と言えようが、この場合、揶揄がどこに現れているかという点で少々特殊である。和歌に籠められた揶揄はどこにあるかを考えるために、他の揶揄する歌を考えることから始めたい。

2

揶揄する歌について、『源氏物語』に例を取れば、近江君に対して姉女御の女房、中納言の君が代作した返歌（常夏巻）がその最たるものである。近江君の歌、

草わかみひたちの浦のいかが崎いかであひ見んたごの浦波（三・二四九）

「いかであひ見ん」を言うために、序詞を用い、歌枕を重ね、近江君自身は大いに気取ったが、常陸、近江、駿河と脈絡なく歌枕を並べている。対する中納言の君の

ひたちなるするがの海のすまの浦に浪立ち出でよ箱崎の松（三・二五一）

は意図的に、念入りに脈絡なく歌枕を重ねる。言われてきたように、和歌だからこそ表現できた揶揄である。しかし、この贈答にある互いの挨拶、「いかであひ見ん」「立ち出でよ、待つ」は、後者が儀礼的であるとしても間違いなく伝わっている。それゆえ近江君をして「をかしの御口つきや。まつとのたまへるを」と喜ばせることになった。表の意味としての挨拶はそれ以外の解釈を生む余地がない。裏の意味としての揶揄は歌意にではなく、その詠みぶりにある。揶揄を理解できなかったのは近江君なればこそであり、理解しないことを見越しての歌である点に一層の揶揄、いうなれば意地の悪さがある。

では、玉鬘裳着の折、祝儀を贈って来た末摘花が「例の同じ筋の歌」すなわち「からころも」の歌を詠んできたのに対し、源氏が返す

唐衣またからころもからころもかへすがへすもからころもなる（行幸、三・三一五）

の揶揄はどうであろうか。この歌を見せられた玉鬘が「「あないとほし。弄じたるやうにもはべるかな」と苦しがりたまふ」ように、歌意は明白である。源氏のこの歌は揶揄だけが内容で、歌意は取り違えようもないが、末摘花本人の反応は語られない。女房の代作でなく、末摘花と源氏の贈答歌が初めて成立した末摘花巻では、女房たちが自信を持って末摘花の歌の方をよしとしていた。末摘花の歌自体は「からころも」を繰返すことと、折に合わぬ歌を詠む点が問題なのであり、近江君の無知とは性格を異にする。末摘花の反応を採り上げようとすれば物語は別な展開を見せようが、近江君と姉女御の対面のような続く場がない以上、それは不要である。この場は「ようなしごと、いと多かりや」との草子地をもって閉じられ、末摘花の反応も封じ込める。「ようなしごと」を「よしなしごと」とする異文によっても同様である。物語中、末摘花の歌はここで終わり、末摘花その人も以後直接登場することはない。揶揄する歌は一挿話以上ではない。

今一つ、和歌自体ではなく、和歌の解釈をめぐる揶揄について触れておく。玉鬘巻、求婚にやって来た大夫監が帰りしなに詠みかけた

君にもし心たがはば松浦なる鏡の神をかけて誓はむ（三・九七）

に対し、大夫監の勢いに気圧されそうになり、震えながら乳母が「うち思ひけるまま」の思いを返した

年を経ていのる心のたがひなば鏡の神をつらしとや見む（三・九八）

の解釈である。監の歌は二句と三句がうまく繋がらないが、対する乳母の歌は「心のたがひなば」「かがみの神」を受け、贈答歌の体をなしてはいる。監が「までや、こはいかに仰せらるる」と聞き咎める。乳母の歌の「たがひ」

とは何と「たがふ」というのか。無論、乳母が玉鬘を都へ連れ帰りたいという願いであり、そのことは監も承知の筈である。が、監は自己の玉鬘への思いと受け取る。それをやや余裕を取り戻した乳母の娘たちが監との結婚を願ってのことと言いくるめる。

この人のさま異にものしたまふを。ひき違へはべらば、思はれむを、なほほけほけしき人の、神かけて聞こえひがめたまふなめりや（三・九八）

娘の言う「この人のさま異にものしたまふを」と「いのる心」との関係については、現行諸注一致してはいないが、監との結婚がうまくゆくよう願っていると言いなしたとする点は諸説違いはない。それまでの経緯抜きに受け取れば、乳母の歌は監との結婚を願っているのだとの解釈も成り立ち得る。監がともかくも納得してしまうのは、もとより和歌の教養に欠けるからではあるが、乳母の歌が二通り以上の解釈を許したからである。贈歌の歌意をずらして切り返す恋の贈答歌と重なるところがある。

3

『伊勢物語』十四段も揶揄する歌を含む章段とされている。

むかし、をとこ、みちの国にすゞろに行きいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけん、せちに思へる心なんありける。さて、かの女、

なか〳〵に恋にしなずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞ、ひなびたりける。さすがにあはれとや思ひけん、行きて寝にけり。夜深く出でにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、をとこ、京へなんまかるとて、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひをりける。

『伊勢物語』中、「みやび」の用例が初段の一例のみであるのと同様、その対極の「ひなび／ひなぶ」もこの段にのみある。京の男が陸奥国の女の「ひなび」たさまに耐えられなかったと解されているが、どこが「ひなび」ているかについて、現行注釈類は女の歌の詠みぶり及び男の歌に対する反応に認める。最初に述べたように、男の歌に関しては解釈に揺れがあり、また、女および女の歌に対する低い評価を見直すべきだとの論考もある。男の歌の解釈には当然ながら、それ以前の部分についての解釈が反映する。男の歌について考える前提として、女の歌「なか〳〵に（A）」、「さすがにあはれとや思ひけん」、「夜深く出でにければ」、女の歌「夜も明けば（B）」につき、一渡り確認しておきたい。

女の歌Aについて。人となりは勿論のこと、「歌さへぞひなびたりける」という。『万葉集』歌「なかなかに人とあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり（十二・三〇八六）」を利用して「なまじっか恋い焦がれて死ぬよりは蚕になったらよかった。ほんの短い間でも」というこの歌の何が「ひなび」ているかについては、平安朝の和歌には用いられず、京の貴族にはなじみのない「桑子」―蚕を詠み込んだからとされている。なぜ桑子になのかといえば、『伊勢物語』では蚕は雌雄が同じ繭にいて夫婦仲がよいというから、と解されてきたが、『万葉集』研究では『伊勢物語』に触れるものの雌雄云々には殆ど言及せず、最近の『伊勢物語』注釈も似た傾向を見せている。[1]『古来風躰抄』がこの歌を『万葉集』歌に選ぶと共に女を「をかしくいはんとて」A歌を詠ませたとすることに注目し

た磯部勇氏は、「ひととあらずは」を「恋に死なずは」、「ならましものを」を「なるべかりける」へと、抑制した表現からストレートな表現に改変した点に鄙びた感じが強調されているようだとする。[2] 蚕は『万葉集』でも用例少なく、「桑子」は当該歌のみ、「蚕（こ）」も「たらちねの母が養ふ蚕のまよ隠り」とそれに類する表現が三例（十一・二四九五、十二・二九九一、十三・三二五八）あるのみである。その一例、「たらちねの母が養ふ蚕のまよ隠りいぶせくもあるか妹にあはずして（十二・二九九一）は『古今集』仮名序古注が歌句を「たらちめのおやのかふ蚕のまゆごもりいぶせくもあるか妹にあはずて」と少し変えて「なずらえ歌」の例に挙げる。仮名序古注や『古来風躰抄』が採り上げた例は類型的表現であり、表現のひろがりを見せない。これを考えると、「桑子」「蚕」は『万葉集』にあっても王朝和歌に通ずる意味で和歌的であったとはいえないだろう。[3] 女の歌Aの「ひなび」た点はやはり第一に「桑子」にあったと考えられる。

「さすがにあはれとや思ひけん」はどうであろうか。この段と共通性のある六十三段で、「思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せ」ず応ずる男が九十九髪の女に対する態度は「あはれがり」「あはれと思ひて」というものであった。両章段の「あはれ」は、妻が尼になって出て行く時になって「いとあはれと思」った例（十六段）、或いは一度絶えた仲が旧に復して「いにしへよりもあはれにてなむ通ひける」例（二十二段）とは「あはれ」の度合いが異なる。十四段の男は憐れんだのはなく、何かしら心を動かされたが、「思ひけん」との推察は本来ありそうもない「あはれ」であることを示す語り方である。

「夜深く出でにければ」は多く男が女に魅力を感じなかったからとされる。これに対し、女の歌Bにあるように鶏が早く鳴いたからだとする説がある。一番鶏の声に夜が明けたと思い違いした、作法通り一番鶏の声で帰ったなど一様ではないが、男の行動を薄情なものとはしない点で一致している。[4] 作法説が男が女に心惹かれたか否かについては留保しているように、薄情でないのは行動の仕方である。作法説が一つの根拠とする「いかでかは鶏のなく

覧人知れず思ふ心はまだ夜深きに（五十三段）」のような、男が鶏の鳴くのを惜しむさまは語られない。絵画化された十四段は男が帰って行く場面を描くが、殆どの絵では男が振り返りもせず帰ってゆく。それは男が女に惹かれていないと読み取られて来たことを示す。『伊勢物語』の語り方がその読みを促したといえるのではないか。男が振り返っている、知られる限りの例外、和泉市久保惣美術館蔵『伊勢物語絵巻』も近年、別章段の絵ではないかとの説が文学・美術史両分野から出されている。[5] 同絵巻の十四段とされてきた絵は、灯台や鼠など本文にない細部が描かれる。それは他章段も同様だとしても、逆に供の童のように本文には見えなくとも当然その場にいた筈のものが描かれていないなど、別章段の可能性は確かにある。

女の歌Bについては、現行注釈書では「きつ」は水槽の方言とする解が殆ど、「はめなで」は「はめなでおくべきか」の下の部分の省略で「はめずにおくものか」の意とする説と「はめてやろう」の方言とする説が相半ばする。「きつ」に比べ、「はめなで」が方言を正確に写している確証がなく、稿者は「はめずにおくものか」と解している。「はめなで」をいずれに解するにしても、鶏を罵って言う「くたかけ」と並んで乱暴な内容、表現の歌である。「きつにはめなで」を、「おくべきか」の省略ではなく、「なで」は和歌にもある「（…すればよいのに）…しないで」の意であり、水槽に入れようと思っていたのに鶏が早く鳴き過ぎて果たせなかったと解されるとして、女が粗野であるとする通説を見直そうとする見解がある。[6] が、それらが例証とする「みるめなき我が身をうらと知らねばやかれなで海人の足たゆく来る」（古今・恋三・六二三、小野小町）等は「なで」の前後の動作主が同一であるのに対し、当該例が女、鶏と異なっている点で疑問がある。

以上を通してみるならば、一途ではあるものの都風の美意識からは遠い女、一度は応じたものの深い「あはれ」を感じてはいない男という構図は変わらない。古歌を利用した「栗原の」の歌はそれを前提に解釈される。

4

男が「京へなんまかる」と丁重な口調で別れを述べてから詠んだ歌「栗原の」は字義通りにはその地の名勝「あねはの松」を都へ持って帰りたいが、それも叶わぬという以外の意味を持たない。それが松ならぬ生身の人間である女に向けられた結果として言外の意味、裏の意味を読み取る必要が生ずる。この歌が掛詞や序詞等の技法により二重の意味を持たせているのであれば、人に向けられた意味の解釈も容易である。また、

須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり（古今・恋四・七〇八、よみ人しらず）

のように、景物に託して心情を詠んだとの読みが重ねられてきた歌も、その積み重ねのゆえに人事に関わる意味は容易に解釈し得る。類歌「志賀の白水郎の塩焼く煙風をいたみ立ちはのぼらず山にたなびく（万葉・七・一二四六）」は『万葉集』では雑歌中の「羇旅作」に分類されているが、平安朝以降、恋歌と理解されるようになった。十四段の「あねはの松」にはそのような読みの歴史がない。同歌をめぐる解釈の揺れの根底にはこれらの技法、読みの歴史がある。

「あねはの松」に託された意味として、「人ならば」を「人並みならば」とし、女が人並みでないから連れて行けないとする大方の解釈と異なる解がいくつかある。「人並みに」説も「夜も明けば」に対する返しとみるかどうかも説が分かれる。異なる解として、現行注釈書には、女が松のようにその地を離れられないからという別れの挨拶とする説、また、女に対し、さあ一緒にと誘う歌だとの説もある。稿者は男の歌は返しではないと考えているが、今、これらにつき少し考えてみたい。

土地を離れられないからの解では「美しいあなたがこの土地を離れらるなら、一緒に都へと誘うのだけれども」の意となり、連れていけないのが残念だと言っているようにみえる。現行注釈書の土地説は渡辺実氏『伊勢物語』

（新潮日本古典集成、一九七六）、鈴木日出男氏『伊勢物語評解』（筑摩書房、二〇一三）である。前者は男の「丁重な挨拶」は「都会的な礼儀」によるもので、「歌の詞が必ずしも本心そのままの吐露でない場合があ」ることを女が理解できなかったとする（「解説」）。そこに辛辣を極めた「わらい」をみる同書に対し、後者も同じく挨拶の歌を女が曲解したととみるが、「物語じたいが創りだそうとしているのは、都鄙の区別を超える男と女の普遍的なありように近づいているようにもみられる」といい、捉え方は同じではない。

「人並み」を否定する立場で、男に対していわば好意的に「栗原の」歌を読んだのが磯部勇、河内修両氏の説である。[7] 前者は、「……の人ならば……ましを」「都のつと」を詠み込む和歌の伝統的技法を確認し、名勝「あねはの松」に女を喩えたのは、「女になみ〳〵ならぬ愛着を懐いた」ので、女も「ならましを」から都へ伴われないことを理解した上で喜んだと解する。「そこからは女を軽侮し、貶める意味は全く汲み取れない」という。後者は、女がこの土地（家）を離れることができないことが前提、都へ連れ帰れないのが残念だ、と解する。そして、「誰に対しても差別しない優しい心を持つ『いろごのみ』」である男は人並み…のような気持ちを「歌に託すはずがない」という。もとより、『古今集』の「古」の時代、いわゆる国風暗黒時代に和歌を継承してきた「色ごのみ」たちに捧げられた激しい顕彰の書、さらには挽歌でもあったのが『伊勢物語』であり、『古今集』後に一回的に成立したとの見解[8]に立っての論であるが、「仮名序」のいう「いろごのみ」がそのような心であったかは別の問題ではないかと思われる。

元となった『古今集』歌の意味を考えるまでもなく、「人ならば」という表現は「人並みならば」という意味を持ち得ない。人である女に当てはめた場合、土地を離れ得るならば、との意と解すべきだと稿者も考える。先に確認したように、物語は男が女に深い「あはれ」を感じたような語り方をしていないと考えられる。たとえ女が土地を離れ得るとしても、男は「ひなび」た女を連れて行きはしない。都鄙の懸隔はやはり埋められない。「人並みな

らば」の解はことばには出さない男の心情を読み取ったものかもしれない。「あねはの松」はあくまでも挨拶の歌である。その挨拶を優しさとみるかどうか。優しく振る舞うことと、真実優しいことは同じとは限らない。

なお、女が古歌を利用して「みやび振り」を披露しようとしたものの意味不明の歌になり、「みやび」の感じとれない「夜も明けば」に呆れた男が本歌の意味を変えることなく「東歌」を「みやび」な歌に変え、男の「みやび」性が強調された、との説がある。[9]『伊勢物語』作中歌に古歌を利用したものはあるが、稿者は十四段も含め、利用したのは多く『伊勢物語』であって、作中人物ではないと考えている。さあ、一緒にと女を誘う歌とするのは竹岡正夫氏注4前掲書で、「あねはの松」讃歌に寄せて男の女に対する心情を「あねは（娘さん）」「都」「いざ」に表したとするものである。当時、地方の美しい風物を見て「都のつとにいざといはましを」と歌うのが「一つの型になっていたものであろう」としても、「いはましを」をどうとるか、また、『伊勢物語』全体の傾向と合致するかどうか、疑問がある。

『伊勢物語』の「男」を好意的に読むことは、「いろごのみ」、また「みやび」の物語として物語全体を好意的に読みとろうとすることにもなろう。一方、女に対して容赦ない諸段に本来の「みやび」の堕落と卑俗化、頽廃をみる野口元大氏「みやびと愛」の指摘も夙にあったところである。[10]次にそれら章段につき少し触れておきたい。

5

ここで確認したいのは六十段、六十二段である。

むかし、をとこ有けり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人に

つきて、人の国にいにけり。このをとこ、宇佐の使にて行きけるに、ある国の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」と言ひければ、かはらけとりて出したりけるに、さかななりける橘をとりて、

五月まつ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

六十段の男が「心もまめならざりける」とは、単に公務多忙だったというだけではなさそうである。だから女は「まめに思はむ」と言う人について行ったのであった。男が「女あるじにかはらけとらせよ」と言った理由について、『伊勢物語』は他の章段と同じく何の説明もしないが、女あるじが元の妻か確かめるためとしてよいだろう。男の歌「五月待つ」は古歌を口ずさんだとの説は、歌に詠まれたのは花橘、その場にあった肴が橘の実という違いがあるためであるが、物語が古歌に別の詠歌事情を与えたための齟齬と考えてもよい。いずれにせよ、男の歌によって女は尼になってしまう。『古今集』にあっては、夏歌とされる「五月待つ」は再会の歌ではなく、無論「昔の人」を責める要素はない。『伊勢物語』にあっては女に厳しい結末となる。勅使になるほど、いわば出世した夫から離れて地方に行った女を物語は愚かとしているようにみえる。

六十二段は更に女に対して容赦がない。「年ごろおとづれざりける女」が「はかなき人の事」について地方へ下る。女は「心かしこくやあらざりけん」とされている。やがて、元の夫が、人に使われ給仕する身となっている女を発見、夜呼び寄せる。

をとこ、「我をば知らずや」とて、

いにしへのにほひはいづら桜花こけるからともなりにける哉

といふを、いと恥づかしと思て、いらへもせでゐたるを、「などいらへもせぬ」といへば、「涙のこぼるゝに、目も見えず、物も言はれず」と言ふ。

これやこの我にあふみをのがれつゝ年月経れどまさり顔なき

といひて、衣脱ぎてとらせけれど、捨てて逃げにけり。いづち去ぬらむとも知らず。

「年ごろおとづれざりける女」は「心もまめならざりけるほど」と相似ているが、六十二段は女を愚かとする視線が初めからはっきり現れている。男も女を夜来させ、「我をば知らずや」「などいらへもせぬ」という。歌も「いにしへのにほひはいずら」と容色の衰えをいい、追い打ちをかけるように「年月ふ経どまさり顔なき」と言う。一通りにしか解釈できない歌であろう。言われているように「官人の妻」と「人につかはれ」るまで身を落とした女との身分的落差が六十段よりも女に容赦ない扱いを生んだ。「いづち去ぬらむとも知らず」という結びも同様である。関連が指摘される『今昔物語集』巻三十「中務大輔娘成近江郡司婢語第四」では男は女を責めず、「コレゾコノツヒニアフミヲイトヒツ、世ニフレドモイケルカヒナシ（五・四〇七）」と詠んで泣く。それを聞いて女が息絶えたのを、「男ノ、心無カリケル也」と評する点、女に同情的である。『今昔』の方が原話であるなら、[11] 六十二段の容赦なさは一層際立つ。

6

離別の結果の女の零落に対して、男が哀惜のまなざしを投げる発想の習慣があるにせよ、[12]『伊勢物語』には六十

段、六十二段のような、現代の眼で見れば女に容赦ない章段も含まれる。物語が女を愚かだとしていることは、実在の人物とした場合にそうであること、読者がそう捉えることとは当然ながら別である。諸注釈を眺めていると、両段の解釈は十四段の解釈と重なっている。六十段に対しては、男が懐かしんで詠んだ歌が意図せずして女を出家に向かわせたとする説が多いかと思われるが、六十二段についてはその残酷さを否定しない。しかし、あくまでも男に好意的な読みは六十二段に対しても好意的である。[13]

再び十四段についていえば、「ひなび」を低く見る視線は否定できず、「栗原の」歌もその視線を持っている。東国―陸奥国章段最後、十五段の「さるさがなきえびす心」という表現があるところに同様の視線がある。人を揶揄する歌との関係でいえば、近江君への返歌を裏返しにしたようなものともいえる。いずれも挨拶の歌である。近江君の場合は本人のみ理解できない揶揄が本人に似せた技巧の和歌に盛り込まれている。陸奥の女は真意は誤解したが、表面上の礼儀は文字通りに受け止めた。末摘花への「からころも」の歌はあからさまで、むしろ物語の遊びではないかと思われるほどである。大夫監とのやりとりも本人は言いくるめられたことに気付かないが、言外の意味があるのではない。「あねはの松」は、本来は一つの意味しか見出せない古歌を改作して別の意味を持たせたところに解釈の難しさがあった。この歌の解釈の揺れの第一の原因である。それと共に、「男」に対し、物語全体の視線に対し好意的或いは肯定的に読もうとする姿勢があるか否かにもう一つの原因がありそうである。『伊勢物語』初冠本百二十五の章段の持つ視線は一様でないと考えられるが、「ひなび」を受け入れず、男から離れて行った女に容赦ない、そのような面があることは否定できない。丁重な挨拶の形をとりながら、男の本心は全く違うのであるが、女の一途さもまた確かに語られている。近江君の無教養さが誇張ではないかと思われるほどに語られていても、どこか愛すべき印象を読者に与え、徹頭徹尾嫌われる大夫監が生き生きして見えるのとどこか通ずる。しかし、それは男に好意的に章

段を捉えることとは別である。

六十段の「五月まつ」も古歌の利用である。多分に恋歌的雰囲気があり、人を懐かしむ歌を再会の歌とした。男が懐かしんで詠んだのか、女を責めて詠んだのか。六十二段のようにあからさまではないが、懐かしんでいるかのようで、少なくとも結果として責める気持のある歌と受け取れる。

人を揶揄する歌、また、責める歌は十四段、六十段のような、一つの解釈しかなさそうな古歌を利用する形をとり得る。あからさまな揶揄、責めとは異なる点に解釈の難しさがある。

※引用本文は、『伊勢物語』、『今昔物語集』が新日本古典文学大系、『源氏物語』は新編日本古典文学全集、『古来風躰抄』も新編全集『歌論集』による。一部表記を改めた部分があり、括弧内の数字は巻数・ページ数を表す。また、和歌は『新編国歌大観』により、表記を改めている。『万葉集』歌番号は『国歌大観』による。

注

(1) 小野寛氏『万葉集全注　巻第十二』(有斐閣、二〇〇八)に研究史が簡潔にまとめられている。最近の注釈では多田一臣氏『万葉集全解』(筑摩書房、二〇〇九)が雌雄云々を「意識したものか」と述べる。『伊勢物語』注釈では、蚕を夫婦仲のよいものの たとえとするが、一つの繭には必ずしも触れない。『鑑賞日本古典文学5』(角川書店、一九七五)で「蚕は雌雄一対ずつ同じ繭にこもるとされていた」とした片桐洋一氏は最近の『伊勢物語全読解』(和泉書院、二〇一三)では夫婦仲云々も含め言及していない。また、松田喜好氏「『伊勢物語』の「ひなび」について―十四段を中心に―」(『文学・語学』一三〇、一九九一・六)も夫婦仲説を否定している。

(2) 『伊勢物語』の「ひなび」について(一)―第十四段の卑陋性の表現をめぐって―(関東短期大学『国語国文』七、一九九八・三)。

（3）鈴木日出男氏「和歌における集団と個」（『古代和歌史論』、東京大学出版会、一九九〇。初出一九八八）は、「たらちめの」三首を含め、母親が娘を管理するという類想、類同表現を持つ作者不明の三十首近い歌々は大和地方の下級官人ないしは庶民たちの歌々と思われるとした。

（4）思い違い説は竹岡正夫氏『伊勢物語全評釈』（右文書院、一九八七）、作法説は五十三段の「夜深き」をも例にする磯部氏注2前掲論文、河内修氏「『伊勢物語』「東国物語（十三段・十四段）注疏稿」（『東洋』四三―一、二〇〇六・四）。

（5）五十三段もしくは二十二段とみる島内景二氏「『伊勢物語絵巻』は何を描いたのか」『伊勢物語の水脈と波紋』（翰林書房、一九九八。初出一九九四）、二十二段とみる相原充子氏『伊勢物語絵巻の探求―和泉市久保惣美術館本の分析』（山川出版社、二〇〇二）等。

（6）近藤明氏「伊勢物語第十四段「きつにはめなで」考―「なで」を中心に―」（『解釈』一九九一・八）、磯部氏注2前掲論文。

（7）磯部勇氏「『伊勢物語』の「ひなび」について―第十四段の「栗原の……」歌をめぐって―」（関東短期大学『国語国文』六、一九九七・三）、河内修氏注4前掲論文。

（8）河地修氏「「やまと歌」の系譜―総論としての『伊勢物語』作品論の試み―」・「『古今集』論―「天皇の歌集」、もしくは「家集」の解体―」『伊勢物語論集―成立論・作品論―』（竹林舎、二〇〇三。初出一九八七・一九九四）等。

（9）注1松田論文は「なかなかに」歌については、夫婦仲のよい蚕との解には無理があり、蚕のように大切にされたいという万葉歌を「恋に死なずは」としてしまったために意味不明の歌になったとしている。

（10）『古代物語の構造』（有精堂、一九六九）所収。初出一九六二・五。

（11）石田穣二氏『新版伊勢物語』（角川文庫、一九七九）補注に「話の細部と歌との間に必然的なつながりがある点から見て、この話の方が原話で、『伊勢物語』のこの段は、刈り込んだ再話であること明らかである」と述べる。

（12）後藤祥子氏「深草の里」（新日本古典文学大系『竹取物語　伊勢物語』月報、一九九七・一）。

（13）竹岡氏前掲書は「女に同情し、失われた若かりし日の美しさを心から愛惜している男の気持がにじみ出ている」と述べる。